

埼玉育ちのグローバル人

駅伝選手だった私がモザンビーク経由で
ミツバチを育てるウメ農家になった話



埼玉県マスコット
「コバトン」

第2回 「素手で女王蜂を捕まえろ」

元 JICA 海外協力隊員 2016 年 4 次隊

寺田 篤哉さん



アフリカの大地を踏みしめる！絶対感動する！
と思いながら、空港のゲートをくぐりましたが、空
港はエアコン完備。ビルは建っているし日本車も
バンバン通っています。日本を出発してから 23 時
間。人生最長の移動時間でした。

アフリカと言えば、赤土と限りなく続く地平線
を想像していた私は、少々拍子抜けをしてしま
いましたが、日本を出た時とは全く違う暖かく乾
いた風を感じ、ここで 2 年間生きていくのかとワクワク
したことを今でも思い出します。

モザンビークはアフリカ大陸の南東部の海沿い
に位置している国です。南北に 2000 km の海岸線を
有しており、マダガスカル島のちょうど向かい側
にあたる場所にあります。国土は日本の 2 倍、人口
は約 4 分の 1 で、植民地時代の宗主国がポルトガ
ルだった影響で公用語はポルトガル語となってい
ます。食事に関してもポルトガルの影響を受けて
おり、首都では新鮮な魚だけでなく、エビ、イカ、
タコなどの海産物を使った料理が食べられました。

協力隊の活動は原則 2 年間。私は、首都からバス
で 8 時間離れたイニャンバネ州イニャンバネ市の
農業経済事務所(SDAE)に配属されました。私の職
種は「コミュニティ開発」。農業技術普及員として
郡内の村を巡回し、農家の困りごとを解決する事
が私の活動となります。私の名前は「テラダ アツ
ヤ」なので、モザンビークでは「Terra」と呼ばれ
ていました。ポルトガル語で大地という意味にな
ります。農家を巡回する中で、覚えやすく縁起の良

い名前だと良く褒められました。

イニャンバネ州は 14 の市と郡から成り立って
おり、私の派遣されたイニャンバネ市は州都だっ
たので行政機関もあり大変住みやすい地域でした。
州内には私以外に 5 人の協力隊員が派遣されてい
ました。また、TOFU ビーチと言われるサーフィ
ンやダイビングが出来る観光地もあり、日本人の
やっているお寿司屋さんもあり、モザンビークに
派遣されている隊員の中で No.1 の人気スポットで
した。



イニャンパネの海

しかし私は、モザンビークに遊びに行ったわけ
ではありません。前回紹介させていただいたよう
に、アフリカ人と一緒に養蜂をしてモザンビーク
の発展に貢献するために行ったのです。ポルトガ
ル語は苦手ですが、養蜂の事になると鼻息は荒め
です。途上国で養蜂を行うメリットとして、①蜂蜜
を売る事による現金収入の向上、②蜂蜜を食べる
ことによる栄養改善、③ミツバチを飼うことによ

る森林保全、この3つがあると私は考えます。

しかし、派遣されて分かったのですが、イニャンバネ市には養蜂家は1人もおらず、ミツバチは木の中に巣を作ってひっそりと生活をしているような地域だったのです。ミツバチが定住する条件として、蜜を出す花がたくさんあることです。イニャンバネ市の地形は海に囲まれた小さな半島になっており、植物の育ちづらい砂地という養蜂をやるには適していない地域でした。配属先の所長に、「ミツバチがいないからどうしたら良い？」と聞いても、「ミツバチがなくて困っているからスペシャリストのあなたを呼んだのだろう」と言われてしまいました。なるほどなるほど、悔しいですが筋は通っています。協力隊ではカウンターパートという制度があり、配属先で現地人とコンビを組んで活動を行うのが基本ですが、私の場合カウンターパートが忙しく、一緒に活動はしてもらえませんでした。

そして一人で仕方なく情報を集めていると、衝撃の事実が発覚します。イニャンバネ州の中で、養蜂専門の普及員が唯一いないのがイニャンバネ市だったのです。その普及員たちは3年の契約で、結果を残すために養蜂の普及に尽力していました。自分の任地にはモザンビークの養蜂のノウハウが無いので、他の隊員のいる郡に行き養蜂についてお手伝いをしながら調査を始めました。



タンベーラ

100 匹に刺された腕

モザンビークでは、「タンベーラ」と呼ばれる木の皮を使った伝統養蜂箱を使って養蜂をしていま

す。木の上にタンベーラを設置しミツバチがそこに巣を作るのを待つ運任せの養蜂です。そして、ミツバチが蜂蜜を貯めたら、そのままタンベーラに火をつけて、ミツバチや幼虫ごと焼き殺します。そして残った蜂蜜を回収するのです。その蜂蜜は空になったペットボトルに入れて販売しています。

日本では、ミツバチに煙をかけて大人しくさせて、ミツバチを育てながら季節に合わせて蜂蜜のみを採取する近代養蜂が行われています。イニャンバネ州ではヨーロッパから近代養蜂箱の支援を受けているので、ミツバチの巣箱はたくさんあります。しかし、新しい道具の使い方が分からず、ミツバチの生態も理解していないので、伝統養蜂から近代養蜂に移行できないという課題が見つかりました。アフリカのミツバチの大きな特徴として、巣箱の環境が悪いと逃去する性質があります。移し替えをしてしまうと、女王バチは働きバチを連れて逃げてしまうのです。



モザンビークの近代用法箱

その課題を解決するために、自分に出来る事は何だろう。そう思っていた矢先に、カウンターパートから、「あなたは何もやってない。イニャンバネ市で活動をしらないのなら日本に帰ったほうが良い。」と言われてしまいました。ごもつともです。埼玉県に例えるとさいたま市の職員が、川口市や川越市の手伝いをしているようなものです。モザンビークの発展のために来たのに、現地人から嫌われていたら本末転倒です。ショックで絶望している私に、苗木作りをしている同僚と一緒に仕事をしようと声をかけてくれました。そこから苗木作りをしながら、養蜂をやるための準備を始めて

いきます。

ミツバチを飼っている人がイニャンバネ市にはいないので、自分で野生のミツバチを捕まえないはいけません。ミツバチのコロニーは、1 匹の女王バチと数千～数万匹の働きバチ、そのうち 10% は雄バチで構成されています。外を飛んでいるミツバチを 1 匹捕まえて、カブトムシのように育てても意味が無いのです。

ミツバチは女王バチを中心に集まる習性があるので、木のくぼみなどに自然に作った巣を斧でこじ開け、数千匹の中から 1 匹の女王バチを捕まえると、他のミツバチが集まってきて捕獲する事が理論上可能です。しかし、日本でそんな事をやっている養蜂家はいませんし、モザンビークにもそんなやり方はありませんでした。苗木作りを一緒にしている同僚が手伝ってくれた結果、試行錯誤を繰り返し、捕獲が出来るようになりました。その間 1 回に 100 匹のミツバチに刺されて、38 度の高熱が 3 日続いたり、木から落ちたり大変な思いしましたが、同僚たちが野生のミツバチの巣の目撃情報を集めてくれたおかげで、新しい技術として女王バチが見つければほぼ 100% 捕獲が出来るようになりました。

しかし、同僚だけでなく現地の農家たちに養蜂を教える技術を根付かせなければ、私が派遣された意味はありません。2 年間の任期の中で出来る事は限られているのが協力隊。計画通りに物事が進まないのも協力隊です。

その後、巣箱を作ろうと、2 週間かけて 50 軒の大工さんに声をかけました。拙いポルトガル語を使いミツバチの巣箱を作れるか聞いて回り、1 軒の大工さんが養蜂箱を作る注文をもらったからぜひアドバイスをしてほしいと言ってくれたので、午前中は苗木作り、午後は養蜂箱作りの日々が始まりました。



巣箱と大工さん

苗木作り

作った巣箱はイニャンバネ州ザバラ郡に出荷するようで、ザバラ郡農業経済事務所(SDAE)の所長に自分が確立した野生のミツバチの捕獲方法をプレゼンしに行きました。先ほど紹介したように、伝統養蜂から近代養蜂にミツバチの群に移し替える時に、女王バチを捕獲する方法を提案したのです。ザバラ郡では養蜂をやりたい農家が多くぜひ来てほしいと言ってもらい、イニャンバネ市の同僚たちからも、「Terra が活躍できる場所はザバラ郡だ」と言ってくれたので、協力隊の活動の中でもレアケースな「任地変更」をすることになったのです。首都にある JICA 事務所も現地人からの要望ならば、ということで、150 km先のザバラ郡に異動になりました。この時、モザンビークに派遣されてからちょうど 1 年が経過しました。